

## 書評：片山一道：ポリネシア人：石器時代の遠洋航海者たち

著者	印東 道子
雑誌名	人類学雑誌
巻	100
号	4
ページ	535-537
発行年	1992-10-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008390">http://hdl.handle.net/10502/00008390</a>

片山一道：ポリネシア人－石器時代の遠洋航海者たち  
1991年，271頁，同朋舎出版，京都，2,500円。

本書は読みだしたら止まらないおもしろさがある。地球の三分の一以上を占める広大な海の半球に暮らしてきたポリネシア人が、どのようにしてこれだけ多くの島々に拡散したのか、また立派な体格と、初期ヨーロッパ人達が自分たちコーカソイドに似ているとも表現した顔つきなどの、いわば謎ときをすることによって、読者にポリネシア人をじつに身近に感じさせてくれる一冊である。

ポリネシアはハワイとニュージーランド、イースター島を結ぶ三角形の地域を指し、広大な海の半球の中にある。その中に散在する多数の島々に住みついて生活してきた人々がポリネシア人である。プロローグとしての第一章では、ポリネシアを様々な側面から紹介している。著者はオセアニアの人々の世界や歴史を考えるには、海の半球が舞台であることを頭に入れてかからなければならないと強調する。そして、生物地理学上の境界線であるハックスリー・ウォレス線を越えてオセアニアへ拡散した人々を“石器時代のスーパーマン”と呼んでいる (p. 29)。

オセアニアの人々と言っても均一な集団ではない。広大な海洋世界は、地理学的にポリネシア、メラネシア、マイクロネシアの3地域に区分され、そこに住む人々も同じ名前でも総称されてきた。これらのうち、本書の題名であるポリネシア人は、人類学的にも民族学的にもほぼ均一なので、同一グループとして扱うことに差しつかえはない。しかし、マイクロネシアとメラネシアは1つの民族グループとして扱えるほど均一ではない。それにもかかわらず、オセアニアの人々の系譜関係などについて人類学者が検討する際には、安易にこの地理学的分類を用いる傾向がみられた。

著者はオセアニアの人類学研究には、ポリネシア、メラネシア、マイクロネシアという地域区分の使用をやめ、R. グリーンンの提唱した「ニア・オセアニア」、[リモート・オセアニア]の使用を提唱している。これは、数万年前から旧石器文化をもった人々が分布していた、ニューギニア北東のビスマルク諸島からソロモン諸島にかけての、大陸部から比較的近距离に連なる島々をニア・オセアニアと称し、それ以東の長距離を航海しなくては渡れない島々をリモート・オセアニアと称するものである。

この区分法は、人類のオセアニアへの拡散という視点から見た場合は有意義な分類である。しかし、リモート・オセアニアとしてマイクロネシアや南メラネシアとポリネシアとを同一区分に含めるのは、少々広汎にすぎる。今後、様々な分野の研究が進展することによって、より具体的な区分が設定されることが期待される。

さて、本書の主題であるポリネシア人は、このリモート・オセアニア地域のなかでも、安山岩線より東の海洋世界（ニュージーランドを除く）に拡散した集団である。これほど広い地域に居住しているにもかかわらず、形質的にも文化的にも強い均一性を示す。第二章ではこのポリネシア集団の形質の特徴が紹介されている。

ポリネシア人は高身長であるのが特徴の一つである。170～173cmという平均身長は、世界でも有数の高身長民族であるという。さらに、ポリネシア人は非常に筋肉質で骨太であり、肥満体が多い。著者はこの肥満傾向は本来のポリネシア人にはなかったと考える。つまり、限られた食糧源でも十分な血中の糖レベルを保つ「儉約遺伝子」を持っている彼らが、ヨーロッパスタイルの糖分過剰の食生活に移行した結果、肥満したというのである。ポリネシア人はまた、胸が長めで、ロッカー形の下顎を持つが、骨格は概して縄文人と共通する特徴が少なくないという。これは大腿骨の柱状性や、下肢長骨の扁平性が顕著であるなどの特徴を指している。しかし、ポリネシア人がアジア起源であることをもっともよく示しているのは、日本人や中国人に特徴的な遺伝子「アジア人特有型」(9塩基対欠損遺伝子)の出現頻度が、ポリネシア集団では100%に近いということである。これによってポリネシア人が東アジアのどこかにそのオリジンを持つことが明らかであるという。

では、ポリネシア人が東アジア集団とは異なる点、つまりポリネシア人のユニークさは何なのであろうか。第三章に紹介されたポリネシア人のユニークさの主なものは、以下の6項である。

1. “筋肉マン形”の大柄な体型
2. 強い肥満傾向
3. 各種身体形質の強い偏異傾向
4. アジア人的な、ときには“過度にアジア人的な”身体特徴
5. 多産傾向

## 6. 早熟傾向

ポリネシア人の研究史においてこれらのユニークさは研究者をひきつけると共に、この集団の系譜関係を探るのに障害にもなっていた。周辺諸集団には類似した形質を持ったグループがないからである。そのためインドやアメリカ大陸、地中海などにオリジンをもとめたりする荒唐無稽の説まで提唱された。このような従来の研究にたいして著者は、系譜論の最大の弱点は「正確な類縁関係が描ければ集団間の系譜関係などはすぐに解決するだろうという思考法そのものの中に内在している」と指摘し、別の仮説を提唱することによって解決を試みている。この発想の転換は成功しているように見える。つまり、ポリネシア人のユニークさを、ポリネシア集団が獲得した形質であると捉え、まずその原因を探ろうとしたのである。以下の2つの仮説が第四章で展開されている。

最初の考えはニュージーランドのホートンが提唱したもので、「寒冷地適応」によってポリネシア人のユニークさを説明しようとするものである。この仮説は、ポリネシア人が身長と体重の比が少なく、ずんぐりむっくりしており、体重の割りに体表面積が少ないなど、熱帯に住む人の身体特徴というより、むしろ寒帯近くに住む寒冷地適応タイプの人の体型に似ていることを指摘したものである。海上で長時間活動するのは、陸上で想像するよりも寒い。身体のいろいろな部分の特徴がバラバラに寄せ集められたのではなく、システムティックに寒冷気候に適応した結果、ユニークな形質が生み出されたとする考えである。

この考えに対して、著者は上記の特徴がポリネシア人の祖集団であるラピタ人にあまりあらわれていないことから、やや否定的である。ポリネシア人に寒冷適応タイプの体型が定着するには時間的に短すぎるというのがその批判点である。そしてもう1つの仮説として、著者自身が提唱する「過成長タイプ」仮説を紹介している。これは、巨人症者の形態特徴とポリネシア人のそれとを比較し、骨格特徴が類似していることに着目したものである。ポリネシア人は歯の萌出年齢が現代のホモ・サピエンスの標準より1から2歳程度早く、初潮年齢も2歳くらい早い。このことは思春期が長く成長期が長いことを意味し、出産可能期間が長いのではないかと指摘する。これは、新しい無人の環境へ拡散し、急速な人口増加が必要な場合にみられる、生態学でいう「r 戦略」にあたるのではないかと着目している。

ポリネシア人の持つ「儉約遺伝子型」にしても長い成長期にしても、つぎつぎと無人の島々へ拡散していったポリネシア人にとって、うってつけの形質的特徴であったことはじつに興味深い。

いずれの仮説も、ポリネシア人の祖集団がこれらのユニークな形質をすでに持っていたのか、あるいは海洋環境へ進出した後に獲得したものであるのかを、今後の発掘資料を用いて検証しなくてはならないが、従来の系譜論に対する新鮮な挑戦であり魅力的である。

最後の第五章と第六章は、ポリネシアへの拡散時期およびルートに関するこれまでの説を紹介してポリネシア人のルーツを探ろうとするものである。この分野は長い間、考古学者の独壇場であった。遺物の形式分類に基いて作られた、拡散のオーソドックスシナリオは未だにあまり大きな修正も施されずに、多くの概説書に用いられている。しかし、最近の周辺諸科学の発達によって、いくつかの異なったモデルが提唱されはじめている。コンピュータを使ったシミュレーションモデルや、歯の形態特徴からみた縄文人とのコネクションを強調したモデルなどである。また、年代測定値の測定資料の材質ごとの修正値を再吟味して、これまで提出された年代を修正し、新しいモデルが提唱されたりもしている（たとえば KIRCH, 1986, ANDERSON, 1991など）。しかし、これらのモデルもやはり作業仮説の域を抜け出していないのである。年代値を伴った考古学資料はもっとも説得力のある証拠であるが、言語や動植物、航海術など、多分野の研究成果をとり込んだ、総合的検証作業が今後必要とされるであろう。その意味において、形質人類学の領域からポリネシア人を研究した本書が、他分野の研究者に与える刺激は大きい。

著者は、ポリネシア人と縄文人との骨格の類似性を強調してはいるものの、祖集団であるラピタ人は南シナ海あたりから南下した海洋民グループであろうとしている。ラピタ人の源郷が究極の研究目標であるとは言うまでもないが、それと目される地域の考古資料が乏しい現在、そこまで追及するのは難しい。

本書は、とかく資料の羅列や学説の紹介などで読者の気をそいだり、難しくなりがちな部分を大胆に省き、軽快な文体で語られているが、少々筆が走りすぎた箇所もいくつかみられる。たとえば、「オセアニアの各民族の歴史には、文字による記録をもてあそぶ歴史学の方法によって明らかにできる部分はまったくない。」(p. 17) というのは、明らかにヨーロッパ人との接触時に残された資料の価値を無視したものである。ポリ

ネシア人が拡散した後、それぞれの環境下において発達させた社会システムや居住様式などは、このような記録資料からもっともよく再建されているのである(例えば DAVIDSON, 1969)。また、ポリネシア人が、いとも簡単にキリスト教に改宗した(p. 32, 傍点筆者)というのも、いくつかの例外を除いて正しくないし、タバ(樹皮布)に用いた植物はハイビスカス(p. 32)ではなくカジノキである。しかしこのようなマイナーな点は、本書の価値をいささかも下げものではない。

オセアニアの先史文化を形質人類学の視点からわかりやすく語った本書は、難しい専門用語にこだわる考古学者に反省を促すかのようなものである。オセアニア研究自体がまだ年月の浅い研究分野である。海洋世界のすばらしい自然と人々を研究対象にすることの喜びを、一人でも多くの人に知ってほしい。そんな願いを込めて書かれた本書は十分にその役割を果たすことであろう。

#### 引用文献

- ANDERSON, A., 1991 : The chronology of colonization in New Zealand. *Antiquity* 65 : 767-795.
- DAVIDSON, J., 1969 : Settlement patterns in Samoa before 1840. *J. Polynesian Soc.* 78 : 44-82.
- KIRCH, P. V., 1986 : Rethinking East Polynesian prehistory. *J. Polynesian Soc.* 95 : 9-40.

印東 道子  
(北海道東海大学国際文化学部)